

# 中九州短期大学 論叢

ろんそう

研究論文

P.-3

短期大学生が認識するボランティアイメージおよび  
ボランティア教育に対する期待の特定

黒木真吾

研究ノート

P.-15

土粘土を活用した造形遊びの内容考察  
—大学生の授業実践を通して—

森本直樹

# 研究論文



## 短期大学生が認識するボランティアイメージおよび ボランティア教育に対する期待の特定

Identification of Junior College Students' Perceived Volunteer Image and  
Expectation for Volunteer Education

黒木真吾\* 田中康雄\*\* 竹下 徹\*\*\* 牛島豊広\*\*\*\*

### 要 約

現在、様々な大震災の発生等を背景とし、ボランティアへの意識が高まる中、ボランティア教育を取り入れた授業科目を開設している学校が年々増加傾向にある。しかし、そのようななか、A短期大学の介護福祉士を養成する学科ではボランティア活動等を取り入れた授業科目は開設しておらず、今後のボランティア教育について考察する必要性が生じている。そこで本研究では、A短期大学の介護福祉士を養成する学科に在籍する学生が認識するボランティアに対するイメージとボランティア教育に対する期待を特定し、今後のボランティア教育のあり方への示唆を得ることを目的とした。調査は、半構造化面接法により行い、25名を対象に1人あたり30分のインタビューを実施した。調査結果は、テキストマイニングにより分析した。ボランティアのイメージに関しては【介護施設における実践】等の5要因、ボランティア教育に対する期待に関しては【高齢者に対する介護の視点を通したボランティアからの学び】等の5要因から構成された。以上の結果から、A短期大学において、ボランティア教育の単位化をする必要があること。さらには、教育内容としては、ただ漠然としたボランティアの概念や対象の提示ではなく、学生の興味・関心を引き出すために、福祉に関するボランティアといった対象を特定し具体的内容を提示する重要性が示唆された。

キーワード：福祉ボランティア ボランティア教育 ボランティアイメージ  
学生の認識 インタビュー

### はじめに

1998（平成10）年度より文部省は大学・高等専門学校・専門学校・社会教育施設における学修の成果、ボランティア活動・就業体験（インターンシップ）・スポーツ又は文化に関する分野における活動に係る学習の成果について単位取得が可能となり、2005（平成17）年には認定単位数の上限が拡大されている。また、2011（平成23）年、東日本大震災のボランティア受入状況を受け、文部科学省はさらに、授業の一環でボランティア活動に参加する場合に単位を認めたり、休学する場合はその間の授業料を免除したりすることなどを全大

\* 中九州短期大学 経営福祉学科 介護福祉士コース 准教授

\*\* 西南学院大学 人間科学部 社会福祉学科 准教授

\*\*\* \*\*\*\* 周南公立大学 福祉情報学部 人間コミュニケーション学科 准教授

学に要請しており、教育的な視点でのボランティアの積極的な導入を求めている。文部科学省（2021）の「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況 調査結果のまとめ」によるとボランティア活動を取り入れた授業科目を開設している大学（大学院のみを設置する大学は母数に含めない）について平成27年度は444校（59.5%）であったのに対して令和元年度は478校（64.4%）と少しずつではあるが増加傾向にあり教育現場においても浸透しつつある。

厚生労働省は「2025（令和7）年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができる」ために地域包括ケアシステムの構築を推進している。その住み慣れた地域において、互助としてボランティアが重要な役割を担う。さらに、介護予防ボランティアという高齢者ボランティアも地域において重要な役割を担っている実態も報告されている。そのことから福祉教育においてもボランティアを通じた教育は重要といえる。荒川ら（2008）は、ボランティア活動の充実を目的とした研究をしており、医療福祉系大学で学ぶ学生を対象としたボランティアのイメージ等に関する調査をしている。そこで、ボランティアについての認識の曖昧さを明らかにしつつ、ボランティア教育の充実を図るために他大学の認識についての必要性もあげている。岡鼻（2013）は学校教育におけるボランティア活動について、ボランティア活動への理解を促すことは勿論、高齢者や障害者に対する理解を深める効果についても期待されているとしている。そのことより、これから福祉系学科に所属し、資格取得を目指す学生にとってボランティア活動をとおして理解を促すことは意義あることといえる。しかしながら、これまでA短期大学の介護福祉士を養成する学科ではボランティア活動を取り入れた授業科目は開設しておらず、今後のボランティア教育のあり方を考察していく必要があると考えられる。

本研究では、A短期大学の介護福祉士を養成する学科の学生が認識するボランティアに対するイメージとボランティア教育に対する期待を特定し、A短期大学の介護福祉士を養成する学科における今後のボランティア教育のあり方への示唆を得ることを目的とした。

## I. 調査方法

### 1. 調査期間

2022年7月1日～2022年8月31日を調査期間とした。

### 2. 調査対象と調査・分析方法

A短期大学の介護福祉士を養成する学科2年生25名を調査対象とし、1人あたり30分かけて半構造化面接法による個別インタビューを実施した。インタビューの際に会話をICレコーダーにて音声を録音し、併せて筆者による記録も行った。音声データは、逐語記録し、デジタルデータ化した。その後、対象データの分析には、テキストマイニングを採用し、多変量解析によりテキストデータを要約・提示し探索的に分析することが可能である、樋口の計量テキスト分析システムKH Coder（version 3.Beta.05b）を用いた。

デジタルデータ化した内容は、データのエラーの有無を確認した後、形態素に分解し処理

を行なった。尚、質問内容に含まれる「ボランティア」「イメージ」「教育」「期待」については、前処理段階で分析から除外した。分析は、検索された先行研究のタイトルの出現頻度を算出し、頻出語を用いてその内容を詳細に分類し、各群の語と語の結びつきを探るために階層的クラスタ分析を行なった。階層的クラスタ分析の方法としては、偏差平方和に基づいてクラスタリングを行なうWard法を採用し、クラスタ間の距離、併合水準を確認し、樹状図（デンドログラム）の作成により解釈を得た。

### 3. 調査項目

インタビュー項目は「基本属性」「過去・現在の福祉ボランティアの経験の有無と内容」「ボランティアのイメージ」「ボランティア活動を取り入れた授業科目を開設する際に期待すること」の4項目である。

### 4. 倫理的配慮

調査対象者へは協力は任意であり、得られた内容については回答者が特定されることはないこと、調査結果は目的以外では使用しないことを口頭で説明し、対象者の研究同意書の提出をもって同意とした。また、同意後の撤回もできることについても併せて書面を用いて説明を行っている。

尚、本調査は、中九州短期大学研究倫理審査会の承認（22-02）を得て実施している。個人情報保護については、鍵のかかる部屋の保管庫に施錠して保管している。

## II. 結果

### 1. 基本属性

性別については、男性は13名（52%）、女性は12名（48%）であった。日本人・留学生の人数については、「日本人」が19名（76%）、「留学生」が6名（24%）であった。取得予定の資格・免許については「社会福祉主事任用資格」が13名（52%）と最も多く、次いで「介護福祉士国家試験受験資格」11名（44%）、「福祉用具専門相談員」9名（36%）の順となった。ボランティアの経験の有無については、「経験あり」が20名（80%）、「経験なし」が5名（20%）であった。

### 2. 結果

#### (1) ボランティアのイメージにおける上位の頻出語

ボランティアのイメージに関するインタビュー内容を形態素に分解・処理し、分析した結果、総抽出語数は4,179語、異なり語数683語が抽出された。これらにおいて、頻出語の上位語は、多い語から順に、「人」（63語）、「思う」（34語）、「お金」（30語）、「自分」（30語）、「活動」（24語）、「行く」（21語）、「高齢者」（19語）、「災害」（19語）、「参加」（18語）、「経験」（13語）、「地域」（13語）等が上位であった（表1）。

表1 ボランティアのイメージに関する頻出語（上位）

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
人	63	報酬	11
思う	34	気持ち	10
お金	30	社会	10
自分	30	内容	10
活動	24	募金	10
行く	21	言う	9
高齢者	19	拾う	9
災害	19	助ける	9
参加	18	介護	8
経験	13	自発	8
地域	13	清掃	8

(2) ボランティア教育に対する期待における上位の頻出語

ボランティア教育に対する期待に関するインタビュー内容を形態素に分解・処理し、分析した結果、総抽出語数は3,211語、異なり語数588語が抽出された。これらにおいて、頻出語の上位語は、多い語から順に、「思う」(51語)、「活動」(34語)、「内容」(26語)、「授業」(20語)、「介護」(19語)、「入れる」(17語)、「参加」(16語)、「人」(16語)、「良い」(16語)、「学校」(14語)等が上位であった(表2)。

表2 ボランティア教育に対する期待に関する頻出語（上位）

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
思う	51	清掃	14
活動	34	体験	13
内容	26	地域	13
授業	20	知る	11
介護	19	行く	9
入れる	17	高齢者	9
参加	16	自分	8
人	16	単位	8
良い	16	経験	7
学校	14	理解	7

### (3) ボランティアのイメージに関する頻出語における階層的クラスター分析結果

ボランティアのイメージに関するインタビュー内容の頻出語を用いて、それらの内容を詳細に分類し、各群の語と語の結びつきを探るために、階層的クラスター分析（最小出現数7、最小文章数1）を行なった結果、5つに分類された（図1）。

クラスター1は「具体的」「自発」「社会」「お手伝い」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「自発的に行う社会貢献。お手伝い。自発的に行うというのは例えば「ちょっとこれしてみたら」とか「これを手伝ってほしいんだ」に応えるというのは自発的ではない。他者から要請を受けて頼まれたら自発的ではない。1つ難しいのが「こういうのをしてみたら」といった紹介された話でボランティアをすれば半分自発的だと思う。完全に自分で調べて探してそこに向いてボランティアをするのが自発的と捉えます」等の内容がみられ、クラスター名は【自発的な社会貢献】とした。

クラスター2は「清掃」「内容」「言う」「経験」「活動」「募金」「報酬」「貢献」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「内容だったら街をきれいにするといい清掃活動とか災害があった場所の後片付けとか人助けとか。肉体労働者の人がしているイメージ。学校単位で取り組んでいるイメージ。自分から自主的にする気持ちで取り組むイメージ。ボランティアする側の好意であるもの。報酬はもらわない。募金活動もイメージとしてある。掃除をすることで心が綺麗になるし、掃除するだけで自分が健康になっていくイメージもある」等の内容がみられ、クラスター名は【対価を求めない無報酬の好意的態度】とした。

クラスター3は「人」「お金」「自分」「参加」「思う」「行く」「拾う」「高齢者」「災害」「地域」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「私が経験した災害があったところに行って復興のためにすること。元の生活に戻るために行なうお手伝い。ボランティアをする人はお金をもらわずに食事を困っている人に提供する。ゴミ拾いと地域のためになること。自分一人でするのではなく、他の人や地域の人たちと一緒にやること」等の内容がみられ、クラスター名は【地域における生活上の課題解決】とした。

クラスター4は「気持ち」「助ける」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「困っているみなさんへ助け合いの気持ち。日本の良いところ「助け合い」に対して熱い。地震や水害によって被害に遭った方に1000円でも2000円でも自分なりにできる力を出して人を助けること。山に住んでいる高齢者がいる。その人たちが自分で買い物に行けないから宅配をすることがボランティア」等の内容がみられ、クラスター名は【助け合いの気持ちと行動】とした。

クラスター5は「介護」「仕事」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「もともと介護とかのボランティアのイメージがなかったが、ドラマを見て介護のボランティアがあることを知った。介護のボランティアは老人ホームに行きボランティアすること」「介護施設にボランティアで来た学生に対してスタッフが介護について教えてあげることもボランティアになる。ボランティアをする人の年齢は関係ない。自分がすることというイメージがある。仕事としてしている人がボランティアをする。」等の内容がみられ、クラスター名は【介護施設における実践】とした。

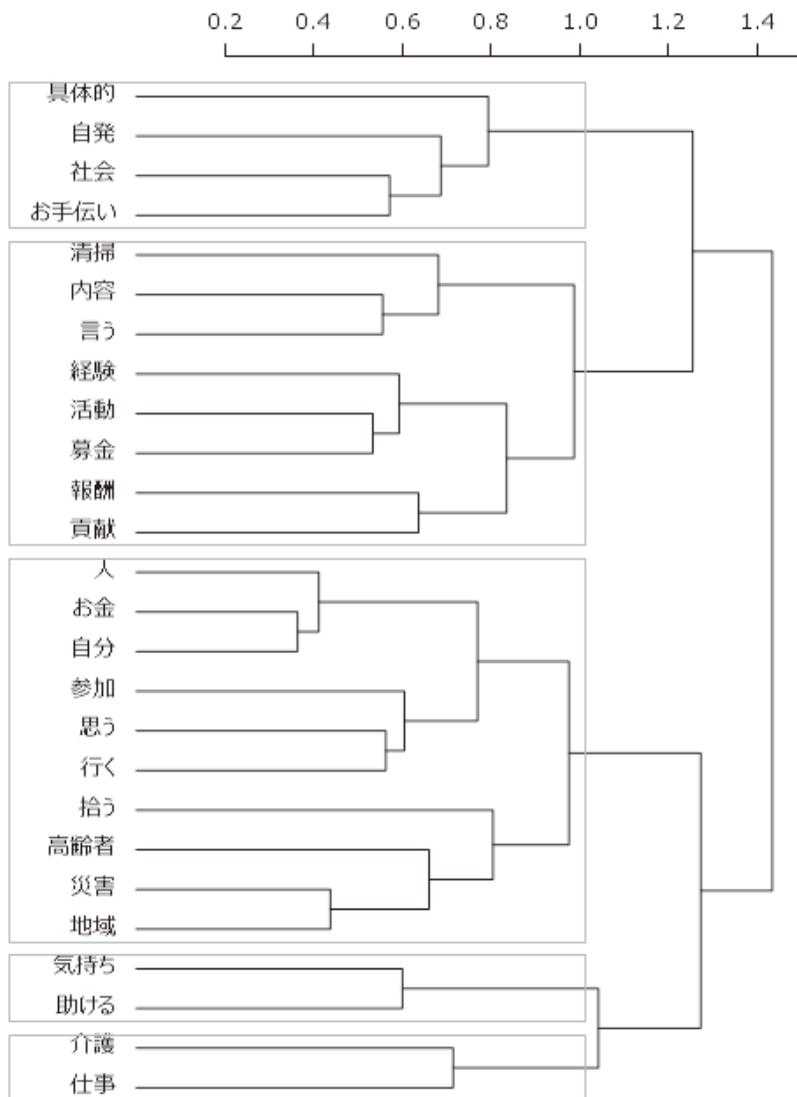


図1 ボランティアのイメージに関する階層的クラスター分析結果

(4) ボランティア教育に対する期待に関する頻出語における階層的クラスター分析結果

ボランティア期待に対する期待に関するインタビュー内容の頻出語を用いて、それらの内容を詳細に分類し、各群の語と語の結びつきを探るために、階層的クラスター分析（最小出現数6、最小文章数1）を行なった結果、5つに分類された（図1）。

クラスター1は「理解」「募金」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「自発的に行う社会貢献。お手伝い。自発的に行うというのは例えば「ボランティアをすることで授業出席扱いになるのもあればやってほしい。地元の清掃活動をした方が良い。地元とは学校の周辺。（中略）。授業であればボランティアについて理解を促す内容もあっていいし、活動もあっていいと思う。授業の何コマ扱いにするのかによってボランティア活動の時間配

分を決めれば良いと思う。地域住民との交流という目的をもって取り組むと良いと思う」等の内容がみられ、クラスター名は【ボランティアへの理解を促す授業での取り組み】とした。

クラスター 2は「介護」「体験」「お手伝い」「高齢者」「知る」「学ぶ」「具体的」「行く」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「高齢者を大切にしないことを多く見られるので、介護ボランティアによって高齢者の大切さを感じれると思う」「介護に関するボランティアは考えには少し出てくるくらいで積極的には求めてないがであればいいかなと思う」等の内容がみられ、クラスター名は【高齢者に対する介護の視点を通したボランティアからの学び】とした。

クラスター 3は「経験」「単位」「災害」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「ボランティアに参加して来ていないのでボランティアに関する知識を少しでも身につければ社会において必要な物を身に着けられて変われると思う。ボランティア教育は社会において役に立つんだと思う。自分磨きするうえで経験したことないことを経験することが重要だと思うのでボランティアを経験したことがない自分にとってボランティアの経験することで自分自身の成長につながると思う。特に、ボランティア活動を多めに入れてもらいたい。インプットとアウトプットがあるとアウトプットをすることが大切なので活動を多く入れることが重要だと思う」「日本人にボランティアの話をしてもらえないと思う。災害の時もそうだったが、冷たい人が多い。ボランティア活動に参加したら単位取得できるという風にしたらいと思う」等の内容がみられ、クラスター名は【実践的経験を通した自己成長の機会の単位化】とした。

クラスター 4は「自分」「参加」「入れる」「活動」「内容」「思う」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「いつどこでボランティアをしているのか知るきっかけを提供してほしいのでそういった内容を知れたらいいと思う。ボランティアという言葉を知っているが、どんなことをしているのかはわからない、さらにはボランティアに関係する団体についても知らないでそういうのも若い世代が知識を持つとボランティアに参加しやすいと思う。できればボランティア活動もしたい。(中略) 活動内容は自分たちがやりやすい内容と思われる自然や環境に関するボランティアをしたい。」等の内容がみられ、クラスター名は【ボランティア参加に向けた具体的内容の提示】とした。

クラスター 5は「清掃」「授業」「良い」「学校」「地域」「人」の単語からなり、インタビュー内容の原文においては「地域とのつながりを学びたい。どこからどこまでをボランティアなのか知りたい。ボランティアについて何も知らないから知ることで活動意欲が高まると思う。どんな人がボランティアを必要としているのかを知りたい」等の内容がみられ、クラスター名は【生活上の支援が必要な地域住民への理解】とした。

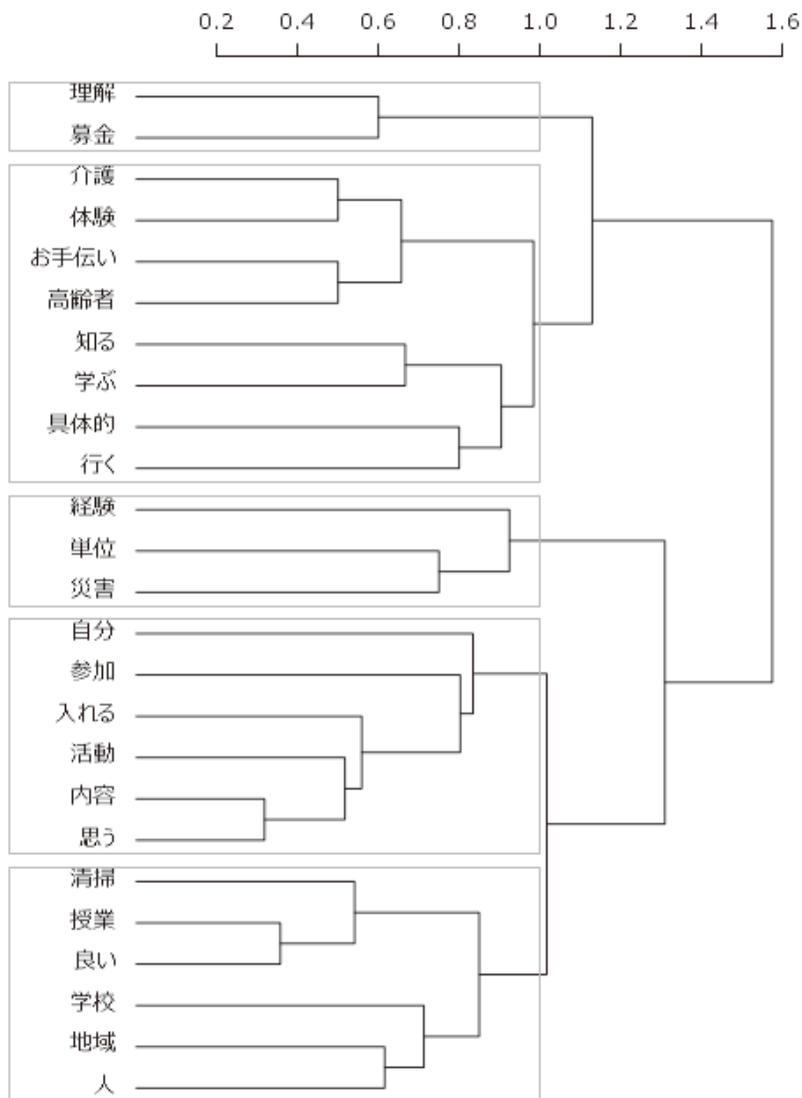


図2 ボランティア教育に対する期待に関する階層的クラスター分析結果

### III. 考察

#### 1. 短期大学生のボランティアのイメージ

学生のボランティアのイメージの特徴を把握するため、A短期大学の介護福祉士を養成する学科の学生のインタビュー内容の頻出語を用いた分析の結果、荒川ら（2008）の調査結果と「人」「思う」「お金」「活動」が共通する単語であり、「高齢者」「災害」「参加」「経験」「地域」といった単語は異なっていた。よって、荒川ら（2008）の調査対象である医療福祉系大学と今回の調査対象である介護福祉系短期大学といった学習分野の違いによる傾向を捉えることができた。

具体的には、頻出語を階層的クラスター分析した結果、ボランティアのイメージに関する内容は5要因に分類されることがわかった。

クラスター 1の【自発的な社会貢献】に関して、ボランティアの特性の1つに「自発性」があり、最も基本的で重視されるべき性格である。学生自身の過去のボランティア経験がある者が8割を超えていたことからその経験の影響を受けていることが示唆された。

クラスター 2の【対価を求めない無報酬の好意的態度】に関して、ボランティアの特性の1つに「無償性」があり、具体的にはボランティア行為の代償を期待しないことである。しかし、原文にもあるように自分の心が綺麗になっていくことや健康になっていくといった自身で感じる報酬を自覚する内容もあることからあくまで対価を求めず好意的態度でボランティアに臨むものの、自分自身で得られるものはあることも明らかになった。

クラスター 3の【地域における生活上の課題】に関して、ボランティア活動のなかには「世話をする」という活動形態がある。地域に暮らす高齢者などが自立した生活を送るために世話をする役割として介護福祉職が存在する。今回の調査対象者は特に介護福祉に関する学習をしている背景があることから今回このような内容も上がったことが考えられる。また、地域における災害ボランティアもある。今回の調査対象者は2016（平成28）年の熊本地震、2020（令和2）年の熊本豪雨を経験している。そういった経験を受け、さらには災害ボランティアとしての経験も大きな理由となっていることが示唆される。

クラスター 4の【助け合いの気持ちと行動】に関して、ボランティアの特性の1つに「連帯性」があり、それは、ともに支え合う関係といった共生のことを指す。介護福祉の学習のなかで地域共生社会を授業内で学ぶ機会がある。そのことから学習内容の影響を受けている可能性が考えられる。

クラスター 5の【介護施設における実践】では、ボランティアのなかに補完的役割というものがあり、それは高齢化のニーズに応えるべく、ボランティアを活用することでサービスを充足していくというのはたらしきのことである。この内容は荒川ら（2008）の医療福祉系大学の学生においては、介護に関するイメージがなかったため、1つの特徴として捉えることができる。

## 2. 短期大学生のボランティア教育に対する期待

学生のボランティア教育に対する期待を把握するため、頻出語を用いた分析の結果、先ほどのボランティアのイメージと比較すると「思う」「人」「参加」「活動」は共通する単語であり、「内容」「授業」「介護」「入れる」「良い」「学校」が異なっていた。

具体的には、頻出語を階層的クラスター分析した結果、ボランティアのイメージに関する内容は5要因に分類されることがわかった。

クラスター 1の【ボランティアへの理解を促す授業での取り組み】に関して、青木ら（2021）によると、大学の授業でボランティア活動に必要な知識を身につけることは学生自身の自信を持つことつながらしている。そのことから、学生自身もボランティアの特性である「自発性」をもって取り組むための目的設定を期待していることがうかがえた。

クラスター 2の【高齢者に対する介護の視点を通したボランティアからの学び】に関し

て、庄子（2015）が示しているように授業で教わる知識や技術に関するボランティア経験により、学校での授業を熱心に受講するようになる。また、荒木ら（2012）によると学生への調査において福祉ボランティアの良いところとして「視野が広がる」と回答した者が最も多かった結果も出ている。それらのことから学生自身も現在学んでいる授業内容をさらに深く学べ、視野を広げられることを期待していることがうかがえた。

クラスター 3の【実践的経験を通じた自己成長の機会の単位化】に関して、ボランティア活動には、自助的役割があり、それは活動者自身のニーズを充足することである。このことから学生は自己成長というニーズをもっておりそれを充足したいと思っていることがうかがえた。

クラスター 4の【ボランティア参加に向けた具体的内容の提示】に関して、ボランティア活動の明確な定説はないと言われており、さまざまな先行研究においても、ボランティア自体が曖昧さをもっているともいわれている。そのことから学生はボランティア活動における具体的内容について知りたいことがうかがえる。また、庄子（2015）は授業の中で、福祉に関するボランティアを紹介することによってネガティブな意見ではなくポジティブな意見、さらには興味や関心などを見出すきっかけになっていることを示している。そのことから、具体的内容を提示することで興味や関心をもつきっかけを学生自身が求めていることがうかがえた。

クラスター 5の【生活上の支援が必要な地域住民への理解】に関して、ボランティア活動には「福祉教育の推進者の役割」がある。それは、共生への社会づくり自覚と参加をすすめることである。学生は介護福祉の勉強を通して地域とのつながりについて学ぶ意欲につながったものとみられる。

#### IV. 結論と今後の課題

本研究では、A短期大学の介護福祉士を養成する学科の学生が認識するボランティアに対するイメージとボランティア教育に対する期待を特定し、今後のボランティア教育のあり方への示唆を得ることを目的とし、インタビュー調査を行い、25名分の調査結果をテキストマイニングにより分析した。

その結果、ボランティアのイメージに関しては【介護施設における実践】等の5要因、ボランティア教育に対する期待に関しては【高齢者に対する介護の視点を通じたボランティアからの学び】等の5要因から構成された。

次に、先行研究の状況と本研究結果を比較した結果、先行研究ではイメージが多様であり曖昧さがみられていたが、今回の調査対象者は介護福祉士を養成する学科に所属していることもあり、【地域における生活上の課題解決】【介護施設における実践】など社会福祉に関する内容が特徴としてみられた。それは今回の調査対象者の授業内容、さらには2016（平成28）年の熊本地震、2020（令和2）年の熊本豪雨を経験していることといった背景により差異につながったと考えられる。また、【自発的な社会貢献】【助け合いの気持ちと行動】といった内容は先行研究と共通していた。

ボランティア教育の対する期待について、まず、ボランティアに関して授業科目として取

り入れることについて【**実戦的経験を通した自己成長の機会の単位化**】が抽出されたことから、学生自身が社会福祉や介護福祉の机上の勉強のみならず実践の場をとおして自己成長を遂げたい思いがうかがえている。よって、A短期大学においてボランティア活動を実践内容として単位化する必要がある。そして、【**ボランティアへの理解を促す授業での取り組み**】が抽出された。そのことは、青木ら（2021）によると、大学の授業でボランティア活動に必要な知識を身につけることは学生自身の自信を持つことにつながるとしていることから学生への理解の促進により自発性を身につけることは有効な方法といえる。しかし、青木ら（2021）が示しているように学校としては学生へ強制参加させることではなく、あくまでボランティア活動の機会提供により、学生自身で目的設定をしていくことが自発性を促すうえで重要といえる。また、ボランティアとは明確な定説がないといわれていることから、【**ボランティア参加に向けた具体的内容の提示**】と【**生活上の支援が必要な地域住民への理解**】が抽出されたようにただ漠然とボランティアをするという提示方法ではなく、今回の結果と先行研究にもあるように、授業に関連する福祉に関するボランティアといった具体的内容の提示が学生の興味・関心を引き出す意味で重要になってくると思われる。

以上から、A短期大学の介護福祉士を養成する学科においては、福祉分野のボランティア活動事例をもとに、実際に支援を受けた側・参加した側の両面から捉えたボランティアの重要性等の具体的内容の提示により、学生のボランティアへのイメージを高め、関心が高まるようなボランティア教育を、今後検討していく必要があると考えられる。

本研究は、A短期大学2年生25名のインタビューによる調査結果を分析対象としたが、対象者数をみると学生のボランティアに対する意識として一部の結果にすぎない。今回はボランティア活動を取り入れた授業科目を開設していない学生を対象にボランティアに対するイメージや期待について調査したが、大学生、短期大学生等の場合、授業時間外においてボランティア活動をしている場合がある。そのボランティア活動が社会福祉や介護福祉に関するボランティアである場合に得られる学習内容についても検証していく必要がある。

## 謝辞

今回、講義等で大変な思いをしているなか、インタビュー調査に協力してくれたA短期大学の介護福祉士を養成する学科2年生の皆様には感謝の意を表します。

## 引用文献

厚生労働省「地域包括ケアシステムの実現へ向けて」ホームページ

([https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/) 2022.6.15 閲覧) .

## 参考文献

青木理奈、鈴木静、小佐井良太、福井秀樹、石坂晋哉（2021）「自主性育成と大学教育—ボランティア活動を行う学生へのインタビュー調査等から—」大学教育実践ジャーナル 19,73-80.

荒井俊行（2016）「ボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」日本教育工学会論文誌 40（2）,85-94.

荒木剛、山本佳代子、通山久仁子（2012）「福祉学科学生の福祉ボランティア活動に関する実態調査」西南女学院大学紀要 vol.16,69-76.

荒川裕美子、吉田浩子、保住芳美（2008）「大学生の「ボランティア」に対する認識—医療福祉を学ぶ大学生を対象とした調査から—」川崎医療福祉学会誌 Vol.18No.1,203-210.

岡鼻千尋（2013）「ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響」心理科学、第 34 巻第 2 号、69.

庄子幸恵（2015）「高校生への啓発活動からみる福祉・介護の魅力についての—考察—福祉人材の確保の可能性を探る—」東北文化学園大学看護学科紀要第 4 巻第 1 号 ,35-42.

中嶋充洋（1999）「ボランティア論」中央法規 .

樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析 2 つのアプローチの峻別と統合—」, 理論と方法 ,19(1),101-115.

樋口耕一 KH Coder ホームページ ,<https://kncoder.com/>.

文部科学省（1998）「学校外における学修の単位認定」ホームページ

([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/1247229.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1247229.htm) 2022.6.15 閲覧) .

文部科学省（2021）「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況 調査結果のまとめ」4. ホームページ

([https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt\\_daigakuc03-000018152\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf) 2022.6.15 閲覧) .

# 土粘土を活用した造形遊びの内容考察 — 大学生の授業実践を通して —

A Study on Content Consideration of Formative Play Using Soil Clay  
Material in University Classes

森本直樹

## 要 旨

本研究は、保育者を目指す大学生を対象とし、幼児期の造形遊びについての内容理解を深めることにある。近年、本学に入学してきた学生からは、これまで造形的な素材・材料を扱う機会が少なかったことを聞く。筆者はこれまでに造形表現において描く活動、つくる活動を中心に様々な素材・材料を扱い、造形表現の理解を得られるように実践を試みている。筆者は、森本（2022）において造形遊びの位置付けを行った。本稿では、その位置付けをもとにして保育者を目指す大学生の造形遊びの理解を深めるため、素材・材料の特性を感覚的に確認して、その理解を得られる題材実践を試みた。その実践によって、学生は土粘土を感覚的に捉え特性を理解し、さらに土粘土への興味や関心を高めることができた。そして、このような実践は素材・材料の特性を熟知できることから、人的環境として活動の活性化に期待できるとした。

キーワード：土粘土、造形遊び、領域「表現」、造形表現

## 1 はじめに

土は、乳幼児にとって身近なものである。園庭の土については、一般的に真砂土が使用されることが多い。真砂土は、水はけが良く、砂埃が飛散しにくいとされ、粒の大きな砂として知られている。また、砂場では穴を掘ったり、水を流したり、山をつくるなどして、乳幼児が夢中になれる環境として扱われている。筆者が保育園に訪問した時にも、子どもたちが砂場や砂場周辺において、砂や土に水を加えて遊んでいる姿をよく見ることがある。土遊びについて保育者に聞いたところ、自由保育の時間ではほぼ毎日のように遊んでおり、主活動では、室内において油粘土を使用しているとのことだった。土や土粘土を題材とした主活動については、保育者がこれまで扱った経験がほとんどなく、実践するには難しいとのことだった。

本学、幼児保育学科では、「表現」領域の科目「造形遊び」において素材・材料経験とし土粘土を扱うことがある。近年、本学に入学してくる学生からは、高校時に美術教育がないことから、土粘土などの造形的な素材・材料の扱う機会がほとんどなかったことを聞く。そのために学生からは、「土粘土など素材・材料の特性を知識として付けたい」、「素材・材料の特性を知ることは製作物への選択肢が広がるように感じる」などの意見が聞かれる。

そこで、本稿では、造形遊びにおいて感覚的な経験を環境や素材・材料から得るため「土粘土」に着目する。

## 2 研究の目的と意義

平成29年告示の幼稚園教育要領・保育所保育指針等では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が示された。その項目、「自然との関わり・生命尊重」では、自然や様々な動植物との触れ合いを楽しみ重ねながら、気付きや親しみを深めることをねらいとして示されている。このことから、子どもたちは日頃の生活において目にする、自然の美しさや現象などを見て触れて、体験を通して関心を持つことが求められている。そして、継続した体験は、更に新たな発見により気付きが増し関心も高まり、体験したことを表現しながら、好奇心、探究心、思考力、表現力などの基礎を培われると示されている<sup>1</sup>。こうした経験は「小学校の生活や学習において自然の事物や現象について関心をもち、その理解を確かなものにしていく基盤」として必要であると明示されている<sup>2</sup>。

幼稚園教育要領（2017）では「環境を通して行う教育の特質」において、幼児が主体的に取り組めるように環境構成や教育環境が、幼児にとってふさわしいものとなるように検討しなければならないと示されている<sup>3</sup>。保育所保育指針（2017）では「保育所保育に関する基本原則」において、「③保育所内外の空間や様々な設備、遊具、素材等の物的環境、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく知識及び技術」と示されている<sup>4</sup>。

乳幼児には、土粘土など素材・材料に触れたり、働きかけるなどの経験は、感性や表現力を豊かにしていくうえでも大切なこととされ、保育者としても「幼児の思いに共感し、受容的な態度で接すること」とされている<sup>5</sup>。このことから、保育者として素材・材料の経験は必要であると考えられる。また、前第44巻1号（森本、2022）において、保育者が素材・材料の特性を知識として持つことの人的環境による取り組みが、より一層子どもたちの活動の活性化に繋がることを挙げている。

よって、本稿では、保育者を目指す大学生が土粘土を素材・材料とし、感覚的な経験をおして、土粘土の特性を理解してもらうための題材化を試みる。また、本稿で使用する土粘土は、市販されている陶芸土粘土とする。この陶芸土粘土（以後、土粘土とする）は、焼成することでお茶碗やお皿などの生活用品として身近なものである。土粘土は、繰り返し使える彫塑用粘土と、成型後に乾燥・焼成する陶芸用粘土がある<sup>6</sup>。市販されている土粘土の特徴は、不純物などが取り除かれているため扱い方が容易という点がある。

## 3 土粘土について

研究者による土粘土の取り組みは、幼稚園や保育園等で広く行われており、「粘土場」を園庭に設置し「粘土質土」の保育教材や保育環境としての可能性を探った研究（真宮ら、2018）、土から絵の具をつくり、その絵の具を使って画用紙に描く活動（竹内、2016）、園内環境に着目し土素材の特性を活かした土のクレヨンの製作活動（石上、2021）など、幼児による実践的な取り組みは見られる。しかし、保育者を目指す大学生の学びとなる取り組みでの題材化が見られない。その要因として、川俣らは保育者がこのような活動を題材化して

取り扱うことは困難であり、土の取り扱いについての知識が必要とされている（川俣ら、2018）。しかしながら、藤原(2015)は、粘土遊びの教育的意義について以下のように述べている。

- ①手触りや重さを敏感に感じ取ることができて「身体的機能や感性を高める」
- ②可塑性があり何度でも作り直すことができ「創造性を育む」
- ③自分が働きかけた行為によっておこる結果を確かめながら次の行為へ発展させることから「科学性を育む」
- ④素材の持つ手触りと思いのままに形を変えることができる特性によって「情緒を安定させ」、集団での共同的な関わりを通して「社会性を育む」

そして、自然の素材・材料からは、形や色、感覚から発想されやすいことを報告されている（花篤、岡田2013）。

このように、これらの研究からは土粘土を扱った体験的なものは見られるものの、保育者が土の取り扱いについての経験や知識が少ないと題材化が難しいと考えられる。

## 4 実践の様子とその考察について

選択科目「幼児造形」受講者20名により「土粘土を砕く体験」、「手作り土絵具で描く」、「光る泥団子づくり」を実践した。その取り組みでは、土粘土による制作体験を通して、感覚的に特性理解が得られる題材実践を試みた。

### 4-1 土粘土を砕く体験（1コマ分（90分））

土粘土は高さ2cm、一辺が10cm程の正形状の乾燥した硬い塊状となっている（図1）。ここでは土粘土の特徴を知るために木槌や金槌を使って粉状になるまでの過程を感覚的に確認する。また、粉状となった土粘土は他の実践においても使用する。以下、手順を示す。

#### 4-1-1 手順

- （1）乾燥した土粘土の塊を感覚的に確認する。
- （2）厚めの透明ビニール袋に乾燥した塊の土粘土を入れる。
- （3）木槌で土粘土を叩いて粉状になるまで砕き、その過程において感覚的に確認する。
- （4）砂状になるまで砕き、砕き終えた土粘土を感覚的に確認する。

#### 4-1-2 結果

ほとんどの学生は、陶芸用の土粘土に初めて触れ、その感想からは土が石のように硬くなることを再確認の様子が見られた。手順（2）において、透明袋にした理由は、土粘土が砕けていく様子を確認してもらうためである。木槌や金槌で土粘土を砕く場面では、力の加減を確認しながら行う姿が見られ、土粘土が簡単に砕けたことに驚いた様子などが見られた（図2）。さらに木槌で砕く様子からは、土粘土が徐々に粒状となったことで、木槌を短く持ち押し潰すような砕き方が見られるようになった。土粘土は粒状から砂状へと変化した。ビ

ニール袋は、木槌で叩いたことで破れるため布ガムテープで補った。手順（４）まで経過時間は、碎き始めて30分くらいとなった。その過程では、手触りなどを感覚的に確認した。なかには、さらに細かく碎こうとする学生の姿も見られた。体験終了時には、袋から土粘土を取り出してふるいを使い粒状と粉状に分け、土粘土が粉状になるまで碎くことができた。学生からは、容器の中の粉状土粘土を指で確認する姿が伺えた（図3）。碎き終えた土粘土からは、サラサラとした砂よりも細かくなっていたことに気づく様子が見られた（図4）。



図1 乾燥した土粘土



図2 土粘土を砕く様子



図3 ふるいをした後に指先で確認する様子



図4 碎き終えた土粘土の状態

#### 4-1-3 考察

この土粘土を碎く体験では、市販されている陶芸用の土粘土を使用した。市販の陶芸用の土粘土の特徴は、不純物などが取り除かれており安心して使用することができ、比較的安価なものとして知られている。学生らは、これまで陶芸用の土粘土を使用した経験がないとのことだった。手で触れた感想は「石のように固い」、「土が固まることを知らなかった」などの感想が聞けた。また、大半の学生は、土が石のように固まることに気づいていないことが解った。他には、土粘土を原材料とした生活用品を聞くと「レンガ」や「食器」などが聞けた。特に食器については、陶器と磁器の違いについて戸惑い気づく様子も見られた。体験前においては、土イメージについて聞いたところ「ドロドロしたもの」、「汚い」、「畑」、「ガラガラ」、「ゴロゴロしたもの」、「園芸」などが聞かれた。この学生らが持つ土のイメージからは、土に関する知識が不足しているように思えた。体験後、学生の意見からは「土を感覚

的に捉えようとしたことで詳細な確認ができた]、「石のように固い塊の土が粉状までなることに驚いた]、「石のような感覚から砂の感覚となり、最後は粉を叩くような感覚を得られた」などの率直な意見が聞かれた。しかし、なかには作業として捉えてしまった意見が少数見られた。今後は体験の取り組みを工夫していきたい。

#### 4-2 手作り土絵具で描く（1コマ分（90分））

土粘土は4-1において粉状にしたものを使用する。制作手順は、『土のコレクション』（栗田、2012）を見習って土絵具作りを行う。この体験からは手作り土絵具を通して土粘土の特徴を感覚的に確認する。以下、手順を示す。

##### 4-2-1 手順

- （1）砂状の土粘土を乳鉢を使ってさらに細くする。
- （2）水を入れた瓶の中に土粘土を入れる。
- （3）瓶に蓋をして、土粘土が水に溶けるまで混ぜ合わせる。
- （4）しばらく置いておくと、透明水と色水にわかれる。
- （5）透明水を取り除き、漏斗状に新聞紙を丸めたものに色水だけを流し水分を抜く。
- （6）新聞紙漏斗に残った土粘土を皿に移して、接着剤としての木工用ボンドを少量加える。
- （7）画用紙に絵筆や指で自由に描いてみる。

##### 4-2-2 結果

土粘土をさらに細かく砕く手順では乳鉢を使用した。乳鉢の扱いについて、ほとんどの学生が今回初めて使用するため筆者により教えた。学生らは乳鉢の扱いに興味を持つことができたため、さらに細かいフワフワの土粘土になるまで砕くことができた。学生らは、その乳鉢から土粘土を擦る音に敏感に反応し、磁器棒と土粘土を擦った振動などを感じ取っていた。手順（2）では、水を入れた瓶にフワフワの土粘土を入れると全体が濁り、瓶の下側では粒状の土粘土が沈んでいるのが見られた。その後、10分程置いていたが、自然に溶ける様子が見られなかった（図5）。手順（3）では、フワフワの土粘土が全て溶けるまでしっかりと混ぜ合わせた。5分程経つと、土粘土は上から水の層、土の層、砂石の層に分かれた。手順（5）では、新聞紙を漏斗状の形に制作し使用した。新聞紙漏斗からは次第に水分がなくなり、トロトロのペースト状の土粘土が残った（図6）。学生はその土粘土を指で触れて感覚的に確認する姿が見られた。手順（6）では、土絵具の定着剤として使う木工用ボンドと土粘土の混ざり具合を確認しながら少量ずつ加えていた。学生の取り組みからは、水のり、洗濯糊、デンプンのりを定着剤として試してみる姿が見られた（図7）。土絵具の完成後は自由画を楽しむこととし、画用紙に描くためには水を少量加えて描いてみた。学生の自由画からは、季節の花やキャラクター、動物などを描き楽しむ姿がよく見られた（図8）。また、土絵具に市販用の水彩絵具を混ぜて着色を試す姿が伺えた。



図5 土粘土を入れて10分程度の状態



図6 新聞紙漏斗に残った土粘土



図7 定着剤の違いを画用紙に描いたもの



図8 土絵具による自由画

#### 4-2-3 考察

手順(1)において、学生らはこれまで乳鉢を使用したことがなく、砂状土粘土をさらに細く砕くことに興味を持っていた。乳鉢の使い方については、少量の土粘土を入れて擦るように砕くなどを筆者により教えた。乳鉢を使用した学生からは、なかなかうまく扱えずに乳鉢を上から叩いて潰す様子が見られた。なかには、器用に乳鉢を回しながら砕いていく様子も見られた。乳鉢からは土粘土を砕く音が鳴り響き、砂状土粘土は10分程度経つと小麦粉のようになった。学生は小麦粉のような土粘土に驚いているかのようだった。そして、一掴み指で触りフワフワとした触感に感動していた。

ここまで土粘土を砕く体験は、4-1において石のような塊から乳鉢を使用してフワフワしたものになるまでを感覚的に確認してきた。これまでの取り組みについて学生の意見からは、「土粘土がここまで細かく砕けるとは知らなかった」、「今回は土粘土だったが他の素材についても試してみたい」、「一つの素材に対して向き合うことができた」、「今まで色など視覚のみだったが、感覚を通して素材の特徴を知ること気が付かされた」などを聞くことができた。

次に、土絵具づくりについては、ほとんどの学生がこれまで体験したことがないとのことだった。本学の造形表現活動において学生が絵具を使用する機会は、描く活動時に水彩絵具、ポスターカラー、アクリル絵具を用いてモダンテクニックなどを取り組んでいる。しかし、絵具の製造過程までは取り組むことができていない。このような機会を通して素材・材料の本来の特徴を知ることが、今後の取り組みにも展開することが期待されると思われる。手作

り土絵具の制作手順は、日本画においても似たような作り方をします。日本画絵具の作り方について学生に伝えたところ、その様子からは初めて耳にするようだった。このことから、日本画にも興味を持たせることが可能であると思われる。次に、手作り土絵具の定着剤として木工用ボンドを少量加える場面においては、学生から「本当に絵具になるのだろうか」などの不安な声が聞かれた。多めに木工用ボンドを加えた学生は、絵具として扱うには難しい硬さとなったため水を少量加える姿が伺えた。水を加えたことによる定着力は、水をどの程度入れるかにもよるが、絵具として描きやすい硬さの水量であれば、土粘土が画用紙から剥がれることはなかった。次に、土絵具による自由画では、描いた画用紙から土独特の素材感が表出し、学生らは始めて目にする新鮮な取り組みとなり興味を持って描くことができた。その感想は「土色が素朴であった」、「絵具とは違う土の質感があった」、「地面に描いているような自然を感じる事ができた」、「土に絵具を混ぜると暗い色となった」、「絵筆や指を使い描いた感覚からは普段と違う新鮮なものを得た」などが聞けた。

手作り土絵具の体験全般からは、ほとんどの学生から「子どもたちにも取り組みさせたい」などの意見を聞くことができた。また、絵筆や指で描いた感覚は、「土のザラザラしたものが感じられた」、「絵筆で描いた時も筆を通じて感じられた」などの意見が聞かれた。

#### 4-3 光る泥団子づくり（1コマ分（90分））

制作方法については、『光れ！泥だんご 普通の土でのつくりかた』（加用、2003）を見習って制作する。制作場所は授業関係のため教室内で行う。土粘土は3-1で粉状にしたものを使用する。制作過程では、乾燥した土粘土に水を加え質感変化などを感覚的に確認する。以下、手順を示す。

##### 4-3-1 手順

- （1）球体の芯となる土台をつくる。
- （2）乾燥した土をふりかけて球体にする。
- （3）仮皮膜づくり。
- （4）皮膜づくり。
- （5）お休みと、みがき。

##### 4-3-2 結果

制作を始める前、学生には水分量による土粘土の変化を感覚的に捉えることを伝えた。制作全般については、教室内で行うために大きめの容器を使用した（図9）。まずは、乾燥したサラサラの土粘土を泥団子の分量よりやや多めの量を容器に移し、適量の水を加えた。手で混ぜ合わせていく過程では、水を加えたことによる土粘土の質感変化を感覚的に確認した。

球体の土台をつくる場面では、手にまわりつくほどのベタベタとした土粘土を手のひらで転がしながら、全体的に乾燥したサラサラの土粘土をまんべんなくふりかけ、手のひらや親指の腹などを使い、綺麗な球体となるようにした。学生からは、容器の中から球体分の土粘土を手で取り出し、ベタベタした土粘土を両手に持ち、不安気に手のひらを使い丸める様

子が伺えた（図10）。手順（3）では、「①少し力を入れて表面を擦る」、「②1ヶ所に力を入れない」、「③球体のカーブに沿って擦る」の制作ポイントとして取り組んだ。しかし、数名の学生からは、球体の表面がボコボコとなり、ひび割れや皮膜がとれるなどしたため、新たに作りかえる様子が見られた。手順（4）では、サラサラの土粘土を手につけて、擦る側の手のひらが汚れなくなり球体の表面が滑らかな感触になるまで、全体が均一になるようにした（図11）。学生らは、この段階で泥団子に光沢が現れると予想していなかったようで、泥団子に光沢が現れたことで感激の声が聞かれた。手順（5）では、泥団子内部の水ぬきを目的とした。しかし、手順（4）の段階で既に光沢が現れたことから、さらに光沢を出すために布で擦り、サラサラの土粘土を布につけて擦る姿などが見られた。内部乾燥が適度な泥団子からは、綺麗な光沢を帯びた泥団子ができた。なかには、擦り過ぎたために光沢が出てこないものや、泥団子内部の乾燥時間の予想が経たないため、不十分な状態で擦ったため表面が剥がれたものや、表面がボコボコになるものも見られた（図12）。



図9 大きめの容器に移す様子



図10 ベタベタした土粘土



図11 サラサラの土粘土を手につけて擦る様子



図12 ボコボコ状のものと表面が剥がれたもの

#### 4-3-3 考察

学生に泥団子の制作経験について聞いたところ、ほとんどの学生は幼児期に制作した経験があり、それ以後の経験はないとのことだった。そのため、今回の制作活動を楽しみにしているようだった。最初の取り組みは、乾燥したサラサラの土粘土に水を加え混ぜ合わせ、土粘土を感覚的に確認することとした。学生からは、加えた水量が多かったため土粘土がド

ロドロとなり、再び乾燥したサラサラの土粘土を加え調整する姿が見られた。また、逆に水量が少なく球体としてなかなか固まらず崩れてしまったのも伺えた。次に、球体の土台作りでは、手に付く程のベタベタとした土粘土を両手に持ち、手のひらを使い球体にすることが難しく戸惑う姿が見られた。学生からは「泥団子ができないかもしれない」などの声が聞かれた。しかし、諦めずに続けている学生からは、丸めていくうちに土粘土が手から球体に移り、手から徐々に土粘土が無くなっていくことに驚くような姿が伺えた。このように、学生の取り組みから、水を加えたことによる土粘土の質感変化や感覚的な捉え方については、以前の経験などにより想定していたと思われる。しかし、泥団子としての土粘土の水分量や、土粘土により球体づくりの経験がほとんどないために、感覚として捉えることができなかつたことが判明した。

最終段階では、内部乾燥が適度な泥団子から綺麗な光沢を帯びた泥団子ができた。なかには、光沢がないものや、表面が剥がれたもの、表面がボコボコなものが見られた。また、手順（５）の段階においては、授業時間に余裕がなくなり完成させることを急いだために光沢がない泥団子となった。光らない原因としては、泥団子の内部乾燥が不十分だったことが一つ考えられた。加用(2003)によると、手順（５）の制作ポイントは「①ざらっとした布で」、「②ゆっくりと」、「③常温の場所で」、「④だんごはまだ傷付きやすいので、置き場所に注意」とし、手順（５）においての目的は、泥団子内部の水分を出しながら目の細かい布で磨き光らせることとなっている。手順（５）の「お休み」とは、泥団子をビニール袋に入れて泥団子内部の水分を抜くことを意味している。ビニール袋から取り出した泥団子は、湿り気を帯びた状態となっていた。少々乾燥させてから布で磨いてみたが、光ものもあれば、光らないものも見られた。加用からは、光らない場合の対処法は、再びビニール袋に戻し「お休み」の手順を行い、乾燥した土粘土を付け２、３分程度磨くとしている。しかし、手順（５）の段階では、授業時間の残りが少なく十分な時間が確保することができなかつた。このことから、初めの土台作りにおいて水分量の調整が図れると、最終段階では内部乾燥時間が短くすることができるのではないかとと思われる。または、泥団子の大きさを小さくするなどが考えられる。次に、泥団子のひび割れや表面が剥がれた原因については、室内環境の空調による急激な乾燥が影響したと思われる。これは、手順（５）制作ポイント③に示されている。そして、表面がボコボコとなった原因は、乾燥した土粘土が部分的な重なりによるものであると思われる。これは、何回も乾燥したサラサラの土粘土をかけるためにできるもので、手のひらでしっかりと球体に磨くことが求められる。ちなみに、加用によると、デコボコは後で直すことはできないとしている。このように、土粘土は気温、湿度など自然環境も関係することから、制作する時期などを検討することが考えられる。そして、光る泥団子づくりからは、適度な内部乾燥や球体表面の湿気などを触覚、視覚などから、土粘土の質感を感覚的に捉え乾燥時間など予想しながら制作していくことが今回の経験により解った。

これらの経験から、学生の感想、意見は「子ども達に経験させたい」、「サラサラの土粘土に大きめの粒があると表面がデコボコの原因になることがわかった」、「光る泥団子は感覚的な制作物であることが今回よく理解できた」、「土粘土を球体にすることがこんなに難しいとは思わなかつた」など聞けた。

## 5 終わりに

ここまで、学生とともに造形遊びの理解を深めるため土粘土による題材実践を行ってきた。学生の意見などからは、今回の体験により土粘土を感覚的に捉え、その特性が理解できたことで興味や関心を高めることができたと思われる。また今後は、別の素材・材料についてもこのような取り組みにより理解が深められると考えられる。土に関しては、栗田によると「100種類の土を集めれば100色になる」とされており、土の特性は奥深いものがあることが紹介されている。また、日本には工芸分野において歴史的に扱われる素材・材料など多種多様に存在している。今後は、多くの素材・材料を見出して人的環境の取り組みについてより良いものとしていきたい。次に、幼児期の造形遊びの題材化については、最終的にできた製作物を結果としてみるものではなく、素材・材料を扱った経験から知識を身に付けていくものとする。さらには、経験から得た知識を主体的な取り組みとして、新たなイメージしたものを表現していく活動として考えている。そして、感覚を通した取り組みは、乳幼児のみならず人的環境としても知識として持ち続けることが子どもに多くの力を導かせることができるとと思われる。今後においては、自然素材・材料を中心に感覚を扱う制作物の題材化を目指していきたい。

## 注

- 
- <sup>1</sup> 文部科学省『幼稚園教育要領解説』建帛社,2017,p.66.
  - <sup>2</sup> 文部科学省『保育所保育指針解説』建帛社,2017,p.128.
  - <sup>3</sup> 幼稚園教育要領解説,前掲書,p.31.
  - <sup>4</sup> 保育所保育指針解説,前掲書,p.17.
  - <sup>5</sup> 花篤實・岡田愨吾『新造形表現 理論・実践編』三晃書房,2013,p.53.
  - <sup>6</sup> 内野務『造形素材にくわしい本 子どもが見つかる創造回路』日本文教出版,p.64.

## 参考文献

- 大橋 功・新関伸也・松岡宏明・藤本陽三・佐藤賢司・鈴木光男・清田哲男『美術教育概論（新訂版）』日本文教出版,2018.
- 加用文男『光れ！泥だんご 普通の土でのつくりかた』講談社,2003.
- 川俣美砂子・阿部鉄太郎・玉瀬友美・三ツ石行宏・山中 文・矢田崇洋・大西美玲「幼児期における「粘土場」遊びの教材性」高知大学教育実践研究,32,2018,pp.111-118.
- 栗田宏一『土のコレクション』フレーベル館,2012.
- 花篤實・岡田愨吾『新造形表現 理論・実践編』三晃書房,2013.
- 藤原逸樹「粘土遊びの指導法に関する一考察」安田女子大学紀要,44,2015,pp.191-198.

# 『中九州短期大学 論叢』 投稿規程

## 1. 刊行の目的

中九州短期大学教員による研究を促進かつ奨励し、その成果を発表することを目的とする。

## 2. 刊行の回数、および原稿の締切

原則年1回、2月末に刊行するものとし、原稿提出は随時受けつける。ただし、当該年度の12月末日以降に掲載が決定した論文については、次年度刊行の『中九州短期大学 論叢』に掲載とする。

## 3. 投稿者の資格

中九州短期大学の常勤および非常勤の教員、または論叢委員会が認めたものとする。

## 4. 執筆代表者

- ① 本誌に投稿した原稿において、第1番目に氏名を記載している執筆者のことを執筆代表者とする。
- ② 投稿者以外の者が執筆代表者である場合には、執筆代表者の他に投稿者を執筆者として連記する。

## 5. 原稿の種類

本誌に投稿できる原稿は、以下に掲げるもので未発表の完成原稿のみとする。また、原稿の内容、表現等については執筆者が責任を負うものとする。

- ① (査読有) 研究論文・研究ノート  
ただし、論叢委員会の判断により、②(査読無) 研究ノートとして掲載される場合がある。
- ③ 調査・研究報告
- ④ 実践報告
- ⑤ 書評

## 6. 投稿の方法

投稿者は投稿申込書を添え、所定の期日までに論叢委員会まで提出すること。また執筆については下記を参照すること。

- ① 原稿の分量は、和文、欧文に関わらず資料、参考文献等を含め研究論文は8ページ以上で20ページを限度とし、その他は20ページを限度とする。この分量を上回る紙面を希望する投稿者は、投稿前に論叢委員会の許可を得ることとする。

- ② 1 ページの分量は 10.5 ポイントの文字を使用し、40 字 × 38 行とする。1 ページ目は表題と要約のスペースとして相当量を減じる。
- ③ 原稿には必ず内容を適切かつ具体的に表した表題をつけ、和文表題には欧文表題も併記する。
- ④ 原稿に要約を含める場合は、和文もしくは欧文の要約をつけるものとし、いずれの場合も 500 字以内とする。加えて、キーワードを付記する場合は、3 ワードから 4 ワード程度とする。
- ⑤ 原稿の書式については、レイアウト見本に従うこととする。
- ⑥ 提出するものは以下とする。
  - ◆ 完成原稿を収めた CD-R、DVD、フラッシュメモリなどの媒体。
  - ◆ 原稿のレイアウト見本（完成原稿を印刷したもの）を 1 部。
  - ◆ 投稿申込書。

※ただし、編集委員会で読み取りができない場合は再提出を要求することがある。

## 7. 別刷

論文 1 篇につき 20 部の別刷が論叢委員会の負担により用意される。

## 8. 校正

執筆者による校正は再々校を限度とする。ただし執筆者の責によらない修正については、これを認める。

内容の大幅な変更、字句の大幅な追加や削除は認めない。初校は定められた期日までに校了し論叢委員会まで提出すること。

## 9. 投稿原稿の審査

- ① 原稿は 2 名以上の者で審査し、論叢委員会が掲載の可否を決定する。
- ② 論叢委員会は、著者に対し原稿中の字句について加除訂正を求め、また、内容について著者に修正を求めることができる。

## 10. その他

本投稿規程の改訂は論叢委員会でこれを検討し、学長の意見を聴きこれを行う。

附則

この規程は平成 23 年 4 月 1 日より施行する。

附則

この規程は平成 26 年 4 月 1 日より施行する。

附則

この規程は平成 27 年 4 月 1 日より施行する。

附則

この規程は平成 29 年 4 月 1 日より施行する。

附則

この規程は平成 29 年 10 月 1 日より施行する。

附則

この規程は令和元年 5 月 14 日より施行する。

附則

この規程は令和 2 年 4 月 1 日より施行する。

附則

この規程は令和 3 年 4 月 14 日より施行する。

## 中九州短期大学論叢投稿論文査読・審査要領

### 編集方針

『中九州短期大学論叢』は、本学教員による研究を促進しかつ奨励し、その成果を発表することを目的とする。本誌の編集は論叢委員会が行うものであり、投稿論文の掲載は、論叢委員会の査読・審査を経て決定される。

論文審査は、匿名審査で公正に行い、論叢委員会が掲載の採択、条件付き採択、不採択を決定する。

1. 以下に従い審査し、著者へのコメントに審査所見を記入する。
  - (1) 下記「2. 審査の観点」に沿い審査し、十分でないところを修正箇所として指摘する。
  - (2) 審査所見は、総合的な所見と、具体的な個々の修正箇所の指摘を分けて書く。
  - (3) 査読者への審査依頼は原則2回とし、1回目に指摘箇所をすべて挙げ、2回目は1回目の指摘に対する修正の有無について審査する。ただし、1回目に指摘したことによる訂正の結果、新たな指摘が発生した場合はこの限りではない。
  - (4) 近年新しい研究方法や理論、新たな研究視点の論文が多数投稿されており、これらの芽を育てる方向で審査をする。基本的には論文の内容は著者の責任に帰すので、主義主張等の相違に関しては、掲載された論文への反論や批判という形で、公式の場で議論する。
  - (5) 却下の場合は、「下記 2. 審査の観点」に準じて、却下の理由を投稿者が納得するように具体的に記入する。また、教育的な観点で、研究の発展や再投稿に役立つような具体的な指摘をする。

## 2. 審査の観点

### (1) 論文の内容について（項目別評価）

原稿の種類 ① 研究論文・研究ノート ② （査読無）研究ノート ③ 調査・研究報告 ④ 実践報告 ⑤ 書評	タイトル (提出日 _____)
--	---------------------

#### I. 項目別評価（該当する評価1つに○をつけてください。）

評価基準 a 適切、b 不適切、c 非該当	
1 執筆要領(注・文献も含めて)に適合しているか	a ・ b ・ c
2 先行研究を的確に踏まえているか	a ・ b ・ c
3 研究目的は明確であるか	a ・ b ・ c
4 分野の理念・政策・実践等との関連付けは明確であるか	a ・ b ・ c
5 研究目的に照らして研究方法は適切であるか	a ・ b ・ c
6 使用されている概念・用語は適切であるか	a ・ b ・ c
7 調査の方法・分析が適切で、結果は明確であるか	a ・ b ・ c
8 論理の展開に一貫性があるか	a ・ b ・ c
9 考察及び結論に新しい知見が含まれているか	a ・ b ・ c
10 表題は内容を適切に表現しているか	a ・ b ・ c
11 要旨の内容は適切であるか	a ・ b ・ c
12 省略語・単位・数値は正確に表記されているか	a ・ b ・ c
13 図表の体裁(タイトル・単位・形式)は整っているか	a ・ b ・ c
14 図表は本文の説明と適合しているか	a ・ b ・ c
15 研究倫理上の問題はないか	a ・ b ・ c

#### II. 掲載についての評価(該当する評価1つに○をつけてください。)

評価	A 無修正での掲載 B 修正後に掲載可（誤字・脱字にかかわること） C 修正後に再提出（内容に関すること） D 掲載不可
----	---

Memo
------

査読・審査年月日 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

(参考) 論文の種別とその定義は以下の通り。

- 研究論文：「新規性」、「有効性」、「信頼性」、「妥当性」があり、価値ある事実あるいは結論を含むと認められるものをいう。
- 研究ノート：論文として十分な結論を得るには至らないが、限定された部分の発見や、新たな研究方法などを含む内容あるいは問題提起的内容をもつものをいう。
- 調査・研究報告：研究結果（データ）の報告に重点を置いたもので、研究の資料として役立つものをいう。
- 実践報告：教育実践の報告に重点を置いたもので、教育および研究の資料として役立つものをいう。
- 書評

執筆者(掲載順)…………… 黒木 真吾 (准教授)  
森本 直樹 (准教授)

編集委員…………… 惟任 泰裕 (講 師)  
久保 英樹 (教 授)  
宇野木 広樹 (教 授)  
宮崎 由紀子 (教 授)

## 中九州短期大学論叢 第45巻 第1号

---

発行日 令和5年2月28日  
発行者 中九州短期大学 学長 中川 静也  
編集責任者 中九州短期大学論叢編集委員会  
カバーデザイン 岡村洋文  
制 作 クギヤ印刷株式会社  
熊本県八代市本町2丁目5-12  
〒866-0861  
電話0965-34-2031

発行所 中九州短期大学  
熊本県八代市平山新町4438  
〒866-8502  
電話0965-34-7651 (代)

# KANSON

Vol.45 No.1 February, 2023

## NAKAKYUSYU JUNIOR COLLEGE

### ARTICLES

P.-3

Identification of Junior College Students' Perceived Volunteer Image and  
Expectation for Volunteer Education  
KUROKI, Shingo

---

P.-15

A Study on Content Consideration of Formative Play Using Soil Clay  
Material in University Classes  
MORIMOTO, Naoki